

三重津海軍所の風景再現の設定根拠整理（案）

(1) 再現する三重津海軍所の風景（設定方針）

《設定》

★何を表現するか。⇒三重津海軍所での活動の様子。

★何時の三重津海軍所を再現するか。⇒海軍所稼働期を中核的な年代として設定。（文久年間頃）

○建物や地形再現の参考とする史料／「三重津船渠及工場図」（製作場の建物配置）、「三重津御船屋絵図」（船屋地区の建物配置・地形）、「川副東郷上下村」・「川副下郷早津江村」（周辺集落・地形）、「白帆注進外国船注進」（安政6年頃の風景）

○建物や地形再現の基本ルール／再現するもの：海軍所稼働期に存在した可能性があるもので、発掘調査や文献史料からある程度の位置や規模、構造が推定できるものを対象とする。

※特に、製作場・御修覆場については、修船活動をより具体的に見せるため積極的に再現する。

※その他のエリアについては、発掘調査で位置や規模、構造が概ね特定できるものを対象とする。

○洋式船再現対象：電流丸、凌風丸、飛雲丸、晨風丸

(2) 再現に必要な項目毎の設定根拠の整理

地区	設定時期	項目	情報		CG制作の設定
			発掘調査	文献・絵図調査	
船屋地区	海軍所稼働期 (文久年間頃)	【堤外地】建物	建物基礎確認（23・24区） 報告書第11集	「三重津御船屋絵図」	<ul style="list-style-type: none"> ・検出された大型建物の建設時期は、安政3年（1856）以前か？ ・安政6年（1859）には、この付近に海軍取調方関係の施設が整備された可能性がある。（白帆注進外国船出入注進） ・海軍所稼働期（文久年間頃）に、検出された大型建物が存続していたかは不明。 ・海軍所稼働期（文久年間頃）の空間利用の様相は特定できないが、再現しなかった場合ただの広場だったという誤解を招く可能性がある。 ⇒CGでの再現を検討
		【堤内地（追加指定予定地）】建物	建物基礎確認、規模未確認 (I地区（2区・17区）)	「三重津御船屋絵図」、村 絵図にラフ画あり	<ul style="list-style-type: none"> ・2区では海軍所稼働期（慶応年間以降）、17区では船屋期の建物基礎が確認されている。 ・CGの設定年代は海軍所稼働期（文久年間頃）であり、この時期は「御船屋」は併存 ⇒「三重津御船屋絵図」を基に再現。
		入江の形状	—	「三重津御船屋絵図」、村 絵図に描写あり	<ul style="list-style-type: none"> ・「三重津御船屋絵図」を基に再現。 ・絵図に描かれたひだ状の地形 ⇒満潮時の入江の風景を再現するため、CGでは表現しない。
		船蔵	—	「泰国院様御年譜地取」に 船蔵の存在を示す記事あり	<ul style="list-style-type: none"> ・文献から「船蔵」・「船小屋」があった可能性はあるが、位置・構造が不明。 ⇒CGでは再現しない。
		係留されていた和船	—	<ul style="list-style-type: none"> ・「佐賀武雄之故実」に船名等の記載あり ・「松乃落葉」「直正公譜」「請御意下」の文久元年4月頃の記事に大早船解体の記載あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・海軍所稼働期も「御船屋」は併存 ・入江に和船は係留されていた。（大早船の多くは解体） ⇒主として小早船、一部、大早船（御召船）を再現。
		葦原	—	鍋島直正公伝「三重津海軍所図」に記載あり	<ul style="list-style-type: none"> ・再現範囲：船屋地区・稽古場地区 ⇒「三重津海軍所図」、「明治20年頃の地籍図」を根拠とする。
		土手の位置・高さ	船屋地区、旧堤防の調査データあり	—	<ul style="list-style-type: none"> ・船屋地区・旧堤防の調査データから復元（1集・11集）
		河川護岸の位置	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・直接の調査データなし ⇒土手の調査データ、絵図・地形図の重ね図を基に再現する。（寛政の村絵図から護岸位置は大きく変化なし。）
河川護岸の形状	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ドック北岸から荒籠までは板護岸 ・ドック南側においても板護岸の痕跡確認 ⇒板護岸で設定するが、満潮時の三重津の風景を再現するため、護岸は見えない。		

地区	設定時期	項目	情報		CG制作の設定
			発掘調査	文献・絵図調査	
稽古場地区	海軍所稼働期 (文久年間頃)	建物	—	「松乃落葉」安政6年8月15日の記事に記載あり	・文献から「海軍取調方三重津出張所」「稽古人詰所」の建物があった可能性はあるが、発掘調査でその痕跡は確認されず、位置・構造が不明。 ⇒再現しない。
		葦原	—	鍋島直正公伝「三重津海軍所図」に記載あり	・再現範囲：船屋地区・稽古場地区 ⇒「三重津海軍所図」、「明治20年頃の地籍図」を根拠とする。
		土手の位置・高さ	船屋地区、旧堤防の調査データあり	—	・船屋地区・旧堤防の調査データから復元（1集・11集）
		河川護岸の位置	—	—	・直接の調査データなし ⇒土手の調査データ、絵図・地形図の重ね図を基に再現する。（寛政の村絵図から護岸位置は大きく変化なし。）
		河川護岸の形状	—	—	・ドック北岸から荒籠までは板護岸 ・ドック南側においても板護岸の痕跡確認 ⇒板護岸で設定するが、満潮時の三重津の風景を再現するため、護岸は見えない。
	海軍所稼働期 (文久年間頃)	稽古場地区と修覆場地区の間の水路	—	—	・絵図や「明治20年頃の地籍図」から、海軍所稼働期にも樋門（樋管）・水路があったことは確認できる。 ・平成に入り水辺プラザ事業による河川改修が行われるまで、元番所樋管は存在していた。 ・R1年度に追加調査を行ったが、コンクリート樋門への改修時、またはその解体時の開削により幕末の護岸は消失していた。 ⇒CGでは「明治20年頃の地籍図」を基に水路を再現する。 樋門（樋管）は、構造が不明なため再現しない。
		訓練の様子・内容	—	「請御意下」などに課目名の記載あり。	・記録で確認できる訓練内容は銃陣訓練。 ⇒再現するとすれば銃陣訓練 ※資料等確認中
		伝習生の服装	—	「直正公譜」「請御意下」の安政5年から文久2年頃の記事に服装に関する記載あり	・士官：羽織袴、陣笠、色足袋 ・船手：黒か紺の筒袖・段袋、左腕に船名を入れた布
		標的	—	鍋島直正公伝「三重津海軍所図」に記載あり	・藩境で大砲を用いた射撃訓練を行ったかは疑問。 ⇒再現しない。

地区	設定時期	項目	情報		CG制作の設定
			発掘調査	文献・絵図調査	
修覆場地区 (製作場)	海軍所稼働期 (文久年間頃)	金属加工（銅）	【坩堝炉】 SX10007・10008炉跡	—	<ul style="list-style-type: none"> ・全景で金属加工の作業の様子は再現しない。 ・個別では、鑄造関係の絵図や「芦屋釜の里」の意見を参考に坩堝炉を使った鑄造作業の様子を再現 ⇒「芦屋釜の里」の操業映像を活用することを検討
		金属加工（鉄）	【鑄込み】 SX9001溝状遺構 【コシキ炉？】 SX9015炉状遺構 【鑄型焼成】 SX9004炉状遺構 SX9009石組遺構	—	<ul style="list-style-type: none"> ・全景で金属加工の作業の様子は再現しない。 ・個別では、鑄造関係の絵図や「芦屋釜の里」の意見を参考にコシキ炉を使った鑄造作業の様子を再現 ⇒「芦屋釜の里」の操業映像を活用することを検討
		建物の配置・規模	—	「三重津海軍所図」 「三重津船渠及工場図」に 建物配置の描写あり	<ul style="list-style-type: none"> ・「三重津船渠及工場図」は図面の描き方から、製作場・御修覆場の整備計画図の可能性が考えられる。 ・発掘調査で確認された遺構の配置は「三重津船渠及工場図」の建物の並びと概ね一致する。 ⇒検出された遺構、「三重津船渠及工場図」を基に配置・規模を設定する。 【検出遺構の場所に合わせるもの】 ・鑄立物形拵場：小型二連炉 ・●：コシキ炉・三連溝状遺構・石組遺構 ・石炭倉庫：ドック石炭集中出土地点脇 【「三重津船渠及工場図」を基に配置するもの】 ・鍛冶大工住居所 ・御番所 ・役所
		建物の上屋	—	「三重津海軍所図」 「三重津船渠及工場図」に 建物配置の描写あり	<ul style="list-style-type: none"> ・金属加工関連施設：鑄造関係の絵図、田中鑄物師資料館、「芦屋釜の里」の職人の意見を参考に上屋再現を行う。 ・番所・役所：村絵図等の描写を基に上屋再現を行う。
		河川護岸の位置	ドック渠口部付近で調査。 荒籠までのラインは判明。	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ドック北岸から荒籠までは調査データに基づき設定。（護岸：板護岸） ・荒籠北側はカクランにより不明。 ⇒寛政の村絵図を基に再現
		河川護岸の形状	ドック渠口部付近で調査。 荒籠までは板護岸を確認。	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ドック北岸から荒籠までは調査データに基づき設定。（護岸：板護岸） ⇒板護岸で設定するが、満潮時の三重津の風景を再現するため、護岸は見えない。

地区	設定時期	項目	情報		CG制作の設定
			発掘調査	文献・絵図調査	
修覆場地区 (ドック)	海軍所稼働期 (文久年間頃)	北側渠壁	14・18・25区	—	土で覆われた状態で表現(各段のエッジがまいている) ※発掘調査土層断面図から復元(木組み骨格+土)
		南側渠壁	22区	—	土で覆われた状態で表現 ※発掘調査土層断面図から復元(土嚢+土)
		渠頭	—	—	土で覆われた状態で表現 ※木組み骨格と土嚢骨格とが切り替わる位置不明。土で覆われた状態でないと表現不可
		渠口(ゲート付近)	14・26区	—	北側壁面は板護岸、南側の壁面構造不明 ⇒北側渠口を基に反転復元する。
		渠底レベル	14・18・22・25区 R1ボーリング	—	渠底レベル=TP-2.0m程度(渠頭から渠口に向かって緩やかに傾斜する) ※潮流堆積物上面(TP-2.33m)に梯子状胴木(厚:20cm)を置き、その上に板(厚:15cm)を張る想定
		渠底構造	14・18・22・25区 R1ボーリング	—	・杭+梯子状胴木+板の組み合わせを想定 ・上面は厚さ15cm程の板張り ⇒板張りを再現 ※大阪築港誌の図面を参考
		締め切り位置	26区 ⇒痕跡確認できず	—	括れ部(H30調査でトレンチを設定した位置)で設定。 ※ゲートの大きさを見ながら位置調整
		締め切り方法	26区 ⇒痕跡確認できず	文久2年の「電流丸の銅板張替え」の記事に記載あり	文久元年:起倒式ゲート(報告書I)で設定。
		締め切り構造	—	—	報告書I:「造船留書」スロイトシユールを参考
		ゲートの起倒方法	—	—	ロクロ ※位置は微調整
		斜路	渠頭部で確認、渠口部では可能性のあるものを確認	—	渠頭部の斜路を再現。
ビット	—	—	丸太の埋め込みで設定。		
修覆場地区 (ドックの構築)	海軍所稼働期 (文久年間頃)	ドック構築前の地形	R1ボーリング実施	村絵図に海軍所整備前の地形描写あり	R1のボーリング成果+村絵図の描写をもとに地表面レベルを再現
		渠底の構築	14・18・22・25区	—	・杭+梯子状胴木+板の組み合わせを想定 ・上面は厚さ15cm程の板張り ※渠底下部構造(板張りの下)の再現は行わない。
		北側渠壁の木組みの組み方(順番など)	14・18・25区	—	・報告書を基に再現(下から順に上に組み上げる。) ⇒1~3段目は製作場造成土の押さえ。 ⇒4段目の役割再検討。(ドックで修理を行った船毎に合わせて設置した犬走り?)
		南側渠壁の構築方法	—	—	土嚢+土 ⇒南側渠壁については不明な部分が多いため、構築段階の映像は見せない工夫をする。
		渠壁の段数	14・18・22・25区	—	4段で想定 ※4段目から渠底への壁面の傾斜角は要調整
		人夫の服装・道具	—	—	品川台場を造る際の作業の様子を描いた絵図を基に再現。
修覆場地区 (電流丸船底修理) ドックの運用	海軍所稼働期 (文久年間頃)	ドックへの進入路	報告書Iで検討	—	報告書Iでの検討内容を基に表現(早津江川を遡り、ドックの角度に合わせて進入する。)
		電流丸の入渠方法	—	—	ドック前までは和船による曳船、その後はロクロを使った曳船で設定。
		電流丸の出渠方法	—	—	・和船による曳船で設定。 ・上流側に向かって船首を向け、出船。
		電流丸の固定方法	—	—	ビーム+支柱を支える板材 ※ビームの数は要調整。
		盤木	—	—	盤木高90cmで設定。
		修理の内容	—	文久2年の「電流丸の銅板張替え」の記事	作業内容までわかるものは、電流丸の船底銅板張替え ⇒電流丸のキールの銅板張替え作業を再現 ※映像で見せる角度は要調整
		人夫の服装・道具	—	—	鋏形蕙斎「近世職人尺絵詞」の木工を参考にする。
		作業手順	—	—	キールの銅板を張る作業で想定

地区	設定時期	項目	情報		CG制作の設定
			発掘調査	文献・絵図調査	
修覆場地区 (ドック南側)	海軍所稼働期 (文久年間頃)	建物	R1発掘調査で建物基礎確認	村絵図に「御新地方」として建物の描写あり	・R1発掘調査の結果：出土遺物の中心は18世紀代のもので、海軍所稼働期の遺物の出土はほとんどなく、海軍所稼働期は人が常に活動を行うような場所ではなかった可能性が高い。 ・海軍所内のどこかに「材木小屋」「ロープ小屋」等の建物があった可能性はあるが、この場所に存在したことを示す資料はない。 ⇒材木置き場等の空間として設定
		河川護岸の位置	村絵図と類似した位置で護岸確認。	村絵図に描写あり	R1発掘調査の結果：寛政の村絵図に描かれた護岸ラインから大きく変化していない。 ⇒寛政の村絵図に描かれた護岸ラインで再現する。
		河川護岸の形状	村絵図と類似した位置で護岸確認。	—	・石積み護岸の裏から板護岸の痕跡確認 ⇒板護岸で再現
周辺景観	海軍所稼働期 (文久年間頃)	周辺の集落	—	村絵図に描写あり	みえつスコープの映像に描かれた範囲で再現
		堤防	—	—	各地区での設定に矛盾点等がないか再確認

★設定根拠資料

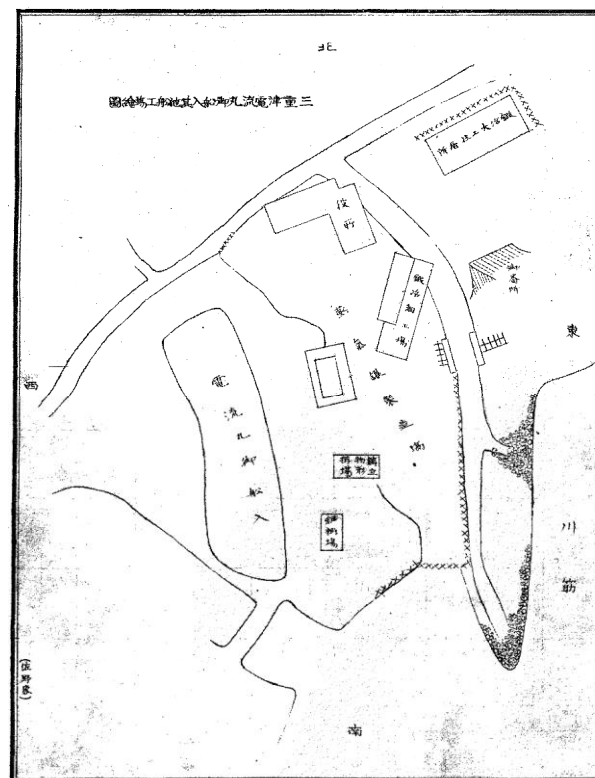
- 堤防・土手・河川護岸・葦原／絵図・発掘調査データ ⇒ 監修：文化振興課
- 建物（船屋地区）／（配置）絵図、発掘調査データ（上屋）不明 ⇒ 監修：文化振興課
- 建物（修覆場地区）／（配置）絵図、発掘調査データ（上屋）不明 ⇒ 監修：笹田先生、文化振興課
- 訓練／（課目・内容）文献 ⇒ 監修：安達先生、前田氏、文化振興課
（服装）？ ⇒ 監修：安達先生、前田氏、文化振興課
- 金属加工／（遺構配置）発掘調査データ ⇒ 監修：笹田先生、文化振興課
（作業の様子・内容）不明？ ⇒ コシキ炉・坩堝炉での金属熔解、鑄込みの様子を再現 ⇒ 監修：笹田先生、文化振興課
- ドックの構造・運用／発掘調査データ、文献 ⇒ 監修：安達先生、前田氏、文化振興課
- 船の修理／文献（項目のみ） ⇒ 監修：安達先生
- 船／和船・洋式船（電流丸・凌風丸・晨風丸・飛雲丸） ⇒ 監修：安達先生



「三重津御船屋絵図」安政2～4年（1855～1857）頃



「川副東郷上下村」「川副下郷早津江村」合成図 寛政4～5年（1792～1793）



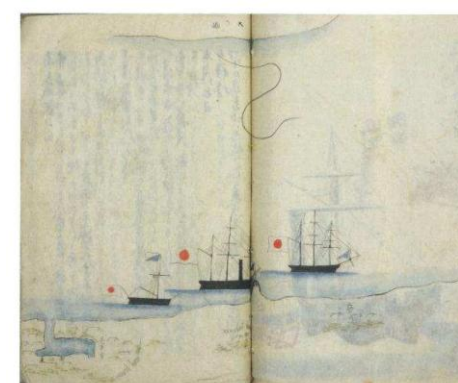
三重津船渠及工場図

「三重津船渠及工場図」

原図：製作場・御修覆場の整備計画図の可能性があり



「三重津海軍所図」（朱書：三重津海軍所期の施設）
慶応以降（1865～）



「白帆注進外国船出入注進」
（安政6年頃の船屋周辺の様子）